

グレアム・グリーンの小説について (完)

宮 井 敏

「朱竹」と言う日本画の技法がある。真蒼である筈の若竹を朱で描く事によつてその青さを一そうきわだたせようと云う訳である。同様に川の中に浮んでゐる何でもない空瓶を事こまかに描写する事によつて月の光を描く事も出来よう。これは憎しみを通して愛の諸相を示そうとした一人の人間の果てしない愛憎の記録である。

恋の悲劇とはけだし別離や死を意味するものではなく、冷やかな無関心と死灰の如き沈黙であるからには、(Somerset Maugham, *Red*,) 憎しみや疑惑、不安、嫉妬も又一つの愛の表現形式でもあらうか。キリストを愛したのは果して嫉妬深いユダであつたのか、それとも卑怯なペテロであつたのか、もし我々が基督受難劇の物語の解釈法を教えられていなかったならば、二人の行動からだけではそれを判断する事は出来まい。(Graham Greene, *The End of the Affair* 1951 Heinemann p. 27) 憎しみは愛と同じ肉体の腺に作用し、

同じ活動をさえ生ぜしめる。憎しみと言うこの破壊的な情熱は正確に愛と同じく人を破滅させる事すら出来るのだ。グリーンは不信と憎悪と嫉妬とによつてこの「愛の終り」をつくり上げているのである。

話は順行逆叙法で始る。一九四三年四月、ある雨の夜、モリス・ベンドリックスはほとんど三年振りで友人ヘンリ・マイルズに出くわす。典型的な英国紳士であり、自信に充ちた政府の高官である彼を、彼が *cocu* であり殆ど自分の恋を手助けして呉れんばかりの寛容さの故に、この年月憎み続けて来たのであるが、傘も持たず、ズブ濡れのまま仄暗い街燈の下に佇んでゐる彼の頬に浮ぶ不思議な自信のなさに心惹かれて、彼の悩みに耳を傾け、最近の妻の不審な行動に苦しみ抜いたあぐく私立探偵に調査を依頼しようかと考えてゐる彼に同意し、モリス自らが替つてそれを買つて出る事になる。

あれは何時の事であつたであらうか。盲人が光線の移り変りを認め得ないように、真黒な猜疑と嫉妬に苦しめられて来た状態では、日教のたつのも実は定かでないのであるが、ともかくも七年まえ、一九三九年の初夏の事であつた。せまり来る嵐の予感に酔払いと子供を除いて人々の幸福感はずでに過去のものとなりつつあつた時、とあるパーティの席上モリスは美しい肉体に純粋な幸福感をみなぎらせたセアラに出会つた。最初は作家としての好奇心から、モデルにする筈だつた高級官吏の生態を知るために接近して行つたモリスではあつたが、次第に心惹かれて彼女と恋に陥る。単に世間的な約束にすぎぬ夫にたえず不満を感じていたセアラはモリスの最初からの不純な動機にもかかわらず彼を愛する様になり、一九四四年六月、無人機V I号ロンドン初空襲の日迄彼等の関係は続くのである。セアラはその美貌に加えて素朴な魂の持主であり、單純率直に何のためらいもなく、モリスの愛をうけ入れ、その行為自体に対しては何の罪の意識も心の疾しさも決して感ずる事のない言わば *adultery* の原型とも言うべきタイプの女性である。彼女にとつてこうした行為の一つ一つは、もしそれが純粹な肉体の悦びをもたらす限り、意味があるのであつて、そこには何等の悔恨も反省もあつた。一切の思考はその行為と共に死んでしまふべきであつて、後に残されるものは次の行為への全身の期待感だけ

であつた。

..... She had a wonderful way of eliminating remorse. Unlike the rest of us she was unhaunted by guilt. In her view, when a thing done, it was done: remorse died with the act. (*ibid.*, p. 56)

何時ものような逢曳の後、問われもしないのに彼女は呟くのである。「あたしはこれまで誰をも、どんな物をも貴方を愛しているように愛した事はありません」。

彼女の行為はたしかに罪の一つには違ひなかつた。政府の高官の美貌の夫人と流行作家との *affair* は立派な *scandal* に外ならなかつたし、この種の事件に対しては極めて非同情的であると言う英国にあつてそれは法的な罪でもあつた。しかも彼女は罪びとであつたであらうか。原始の社会に於て *monogamous family* の出現以前では少くとも掟にふれる事はなかつたであらう。時の経過や人間相互の關係が約束をつくり、人間同志の約束が道徳を生み、それに外れるものを罪なりと断定する。一体時と場所とをこえる絶対の道徳があるものであらうか。少くともセアラがモリスに寄せる愛情はそれが人間社会の規準から見て何であれ、限りなく純粹であり美しいものであつた。セアラにとつてモリスは言わば彼女の言う *dear God* との關係にもおきかえうる絶対のものであり、何物の介入をも許さない、一切の社会の掟から隔絶した場における対決であつたのである。この現在の一瞬に最高

の喜びを求める彼女の自己放棄は又、「永遠の生命」の相を追求してやまない。永遠とは時間の連なりではなくして時間そのものの欠除であると言われる。幾何学の公理で言う「点」の存在のように、セアラの時間は広さを持たず、空間を占めない無限のものであつた。(丁度 *The Man Within* 1929 のアンドリュースがエリザベスに寄せる愛情の瞬間を「確実な時間」と呼んでいるのを思わせる。) したがつてそれは始めがなく終りを持たない。グリーンが、“The end of the affair”と言つた場合、affair とは始まれば何時かは終ると言う一つの事件であり、その情事の果てる所から昇華された永遠の love は生れると言う事を暗示しているのであるが、時のない世界での道徳以前の loveこそがセアラの愛情であり、生命を堵したものであつた。

一方、作家モーリスは時の世界にすんでいる。セアラによる彼の愛情は不信と猜疑と嫉妬にみちたものであり、彼女の献身の愛にもかかわらず、絶えずいさかいの種をもちだすのはモーリスのほうであつた。人にとりついて離れようともしない *obsession* の故に彼の苦しみは生き乍らの地獄であり沙漠であつた。

He is jealous of the past and the present and the future. His love is like a medieval chastity belt; only when he is there, with me, in me, does he feels safe. If only I could make him feel secure, then we could love peacefully,

happily, not savagely, inordinately, and the desert would recede out sight for a lifetime, perhaps. (*ibid.*, p. 107)

率直に彼自らが語つてゐる。「わたしは嫉妬深い男である。——おそらく一篇の長い嫉妬の記録、つまりヘンリーへの嫉妬、セアラへの嫉妬となるらしい文章の中でこんな事を書くのは愚かしい事だろう……私は恋がわたし自身の恋とは別の形をとる事がありうるとは信じたくなかつた。わたしは愛情をわたしの嫉妬の程度によつて測つたから、その標準からおせば、もちろん彼女はわたしを全然愛している筈はなかつた。」救われぬ魂。結局はセアラの方が正しくて自分の方が間違つてゐたのではないかと言う疑いにとられ乍らも、モーリスは彼女を冷淡だから嫉妬しないと言い、ありきたりの人間的な感情にとられる事がないからだと言ふ。一方セアラはその純粋な気持から、ただモーリスの不幸な姿を見たくないだけだと答へ、自分の彼に対する愛が不変のものであるのを納得させる事に疲れてしまふ。同じ罪を犯し乍らも二人の考え方はこのように喰違つてゐるのである。嫉妬で裏打ちしたあくまでも地上の愛と、自らを放棄してしまつた一途の純粋な愛、次元を超えた時のない世界に浸つてゐる女と、過去に苦しみ現在に不満であり未来に希望をもてない、「時」の重みの下に生きる男と、つまりは love と affair の本質的なくい違いを作者は極めて対照的に描き出しているのである。

考えて見ればモーリスの心理はつよい独占慾から発した人間感情の動揺であり、人間の誠実を信ずる事のみが或は唯一の救いかもしれぬと感じ乍らもそれを信じ切る事が出来ないと言う *dilemma* に陥っているのであるが、そこに不安定な社会情勢が大きく影響している事は見逃せない。生れ乍らの跛のために兵役は免除されており、身についた職業的習慣は一日五百語づつの早さで創作を続けさせてはいるが、空襲下のロンドンがさまざまな形でその心理に陰影を投げかけている事は否むべくもない。世界史の舞台が大きく廻ろうとしているさなかにあつて、しかも形式上そうした動きから孤立している事が彼をたえまない神経的不安にかり立てる。はげしい世の中の動きとは完全に無縁にはなり切れず、と言つて一人の女性の愛にすがつて生きる事も出来ない。こうした時代に人と人との間に生じた愛情以外に何にたようと言うのかと自問し乍らも、目前の愛を信じ切る事が出来ないと言うこの悪循環はつまりは戦争の片隅に生きている市民の象徴でもあるうか。

一九四四年六月、独軍の新兵器V I号のロンドン初空襲の夜、何時ものような逢曳のあと、セアラの家は爆撃のため破壊され、様子を見るために階下に降りたモーリスは玄関の扉の下敷となり失神してしまふ。かけ下りて来たセアラは壁土の下から突き出ている血の氣のない腕を見て、彼が爆死したものだと思ひ込み、部屋に帰ると指の爪が掌にくい込む程つよ

く手を握りしめて神に祈るのであつた。子供の頃さえ神に祈りを捧げた事もなく祈禱の言葉も知らない彼女が。「愛する神様」、彼女は必死の思いで話しかけた。「私を信じさせて下さい。私は信じられません。信じさせて下さい。私は自分が良くない女である事は存じております。私は自分を憎んでいます……」

Let him be alive, and I will believe. Give him a chance.

Let him have his happiness. Do this and I'll believe. I love him and I'll do anything if you'll make him alive. I'll give him up forever only let him alive with a chance. (*ibid.*, p. 165)

蘇生したモーリスが部屋に入つて来るのを見て愕然としたセアラは、それが彼女の希つた奇蹟ではなくして、ただ爆風に倒されて失神していたモーリスが意識をとり戻しただけの事であるのを見て思わず落胆する。彼女が誓つた神との約束がいかにむずかしいかを思う時、これからの索漠たる生活を考へて思わず戦慄するのであつた。セアラの悲劇はつまりはこの小説は実はここから始るのである。彼女は約束を破らなかつた。誰にも洩らさずに彼女はモーリスの前から突然姿を消してしまふのである。

自分がモーリスに求める愛の喜びは他のどのような男性からも得られる筈のない事を知つていたセアラにとつては彼と離れている事の苦しみは非常なものであつた。且ての日々に

よくモーリスに、互に逢えなくなる事はあつても愛に終りはない事を説いた彼女ではあつたが、苦しみは予想外に大きいものであり、絶望の中に疲れ果てては神を憎み神を呪い、果てしない愛憎の焰につつまれて眠られぬ夜は続く。彼女にとつてこの愛が永遠なものであるためには、情事はここで畢らなければならない。生々しい実感を伝える地上の愛はそれ自体止揚されては神への愛に到らなければならない。——と考へつつもおそろう激情の嵐にともしれば最初にして最後の彼女の約束は破れそうになる。夜毎の迷いと煩悩の苦しみを命を削る思いで書きつづる彼女であつた。

I'm not at peace any more. I just want him like I used to in the old days. I want to be eating sandwiches with him. I want to be drinking with him in a bar. I'm tired and I don't want any more pain. I want Maurice. I want ordinary human love. Dear God, you know, I want to want Your pain, but I don't want it now. Take it away for a while and give it me another time. (*ibid.*, p. 148 & f.)

こうした苦しみのさなかにあつてセアラはふと、一体無關心であるものを憎む事が出来るだらうかと疑いはじめる。自らの誓いの故に神を憎むと言う感情は実は神への愛と表裏相通じているのではなからうかと言う考えから形のないものとして取扱つていた神と言う存在が結局のところ、モーリスへ寄せる愛情と同じように心理的実感として感じられて来る。

モーリスを愛しくしたとき、つまりは情事のおわつた時に、始めて神に対する憎しみが湧いて来たわけであり、同時に神を最も深く愛しているのだと。この conversion を契機として祈禱を知らないセアラであつたが、知らず識らずの内に歩一歩神に近づいてゆき、砂漠は少しずつ消えてゆくのである。

一方彼女の回心を知らされていないモーリスはセアラの新しい愛人(彼女の言う dear Dad)を地上の人間であると考へますます絶望に陥つてしまふ。自分の心に悪魔が巣喰つており、その悪魔が自分の想像の中で活躍するのだと信じたモーリスは、神が人間を材料として聖徒をつくり出したのと同じ時に悪魔も又我々人間がすべて裏切者となる様に野心をもつて動きはじめたのだとさえ考へるようになる。荒涼たる砂漠の風景の中で孤独に蝕ばれた彼のこうした姿は言わば平凡な日常の生活における文明の頹廢の現われであつて、作家であるが故に現代の病患である危機感に敏感ならざるを得ないと言う情況なのである。単に日常的な習慣性の故に日々の人々の動きの底にひそむ違和感を無視してしまふ人々が多いのであるが、彼の感受性は自らがそれを意識するとならないにかかわらず、絶えず末梢神経で感じる以上の何物かがある事を探りあてているのである。現代の病患とは、一つには単なる幻滅より以上の苦悩に充ちた孤独感 an awareness of solitude であり、二つには自分の外部にある或る人、或る物に到達出来ないと言う罪悪感 a sense of sin である

と言われる。(T. S. Eliot: *The Cocktail Party* 1950 F. & F. p. 117 & ff) 最初モーリスはセアラとの歓喜に充ちた恍惚境を本當の現実だと考えていたのであるが、それを経験した後に残つたものは何の現実性もない悪夢のような記憶の残骸だけであり、ある一つの人間関係がもはや存在しなくなつたと言う空虚な孤独感だけであつた。ともあれ彼のこの俗人的苦しみはセアラの回心と著しい対照をなしており、女の宗教的解脱と男の煩惱の迷いととの対比は極めて印象的に構成されている。言いかえれば、自己自身が永久に邪惡な性質の苛責に悶えている地獄の苦しみと、悔い改めようとした人間が自ら進んで受け容れようとした淨火の責苦のための煉獄の苦しみ (T. S. Eliot: *Selected Essays*, 1951, 3rd. ed. F. & F. p. 265) の象徴なのであつて、地獄の苦しみがすさまじければすさまじい程一層煉獄における救済の可能性は強調されているのである。

私立探偵のもたらしたセアラの日記を読んでモーリスは驚きにうたれる。始めて知る彼女の真意は彼を愕然とさせるに充分であつた。直ちに何年振りかで彼女の家へ電話をかけて面会を求めるのであつたが、セアラは頑なに拒み通し風邪の床から彼を避けて雨の降る街に走り出る。教会で追いついたモーリスの手をつくした忠告にもかかわらず最後迄彼の申し出を拒絶し、もう一度やり直そうと言う彼の言葉を一蹴してしまう。なすすべを知らず茫然と帰宅するモーリス、祭壇の

前で涙に濡れて震え乍ら蹲つてゐるセアラ。二日後電話がかつて来て彼は彼女の死を知らされる。幾度か彼女の愛を疑い、絶えまない焦慮感から彼女を苦しめ、別れては彼女の神に対してすら嫉妬してやまなかつた彼ではあつたが、時々彼の頭を掠めた考え、結局は終始一貫彼女の方が正しかつたのではあるまいかと言う考えを肯定せざるを得ない様な立場におかれる時、彼女の回心をしいて無視しようとし、彼女の信仰を頭から否定し、あくまでもこの腥い地上の愛に彼女を引き戻そうとした自分の態度を振返つてみて、次第に彼は作家として頑強に信じていた人生の価値に疑いをもちはじめた。

「わたしは自分の仕事をありのまままで認識した。——何週間なり何年間なりわたしの生活を支えてくれる煙草のような麻醉剤として。もしわたしが信じたがつていたように、我々が死によつて消滅するものなら、数冊の書物をあとに残したと言う事は壺や安物の寶石を残すのとどこが違うだろうか。」

死の直前モーリスに宛てた手紙の中でセアラがカソリックへの信仰を告白していたために葬儀の様式が問題となるが、結局それも済んでしまつたあと、御用済となつた私立探偵がやつて来て彼の子供が夜中激しい腹痛におそわれた時、夢に彼女が現れて脇腹をさすると忽ち痛みがとまつたと言う話をする。一方、生前彼女が相談相手としていた合理主義者スミスがやつて来て日頃の無神論にもかかわらず彼女の遺髪を貰うけたいと言う。見れば彼の頬の赤痣は拭つたように消え

さつていた。こうした不可思議な現象を、奇妙な不合理な偶然として意識的に無視しようとするモーリスは最後迄神と妥協する事が出来ない。セアラを奪い去り、彼を砂漠の中に置き去りにした神、二人の幸福をめちやめちやにした神に向つて彼は絶叫する。

You've taken her, but you haven't got me yet. I know
Your cunning. It's you who take us up to a high place and
offer us the whole universe. You're a devil, God, tempt-
ing us to leap. But I don't want Your peace and I don't
want Your love. I wanted something simple and easy.
I hate you, God, I hate You as though you existed.
(*ibid.*, p. 236)

一九世紀の物の考え方の中心をなすものは trial and error をつみ重ねる事によつて人間は永遠の相をもちうるだろうと言う人間主義的樂觀にあつたようにおもわれる。社会においては真理は多数決で決められるだろうし、進化論は人間の自然なる進歩を約束してくれる。人間の頭脳は大自然へのたえない挑戦の結果、天変地変をさえ制御しうる技術を学びとるだろうし、合理主義は一切の人間的なやみをあまさず明快に解決してくれる事になつていた。ところが、こうした大きな間に対する答である筈だつた二十世紀と言う時代はもはやその前半を終えてしまつているにもかかわらず、何等の結論にも到達しないままに何時とは知れぬ不安と動搖をくりかえ

しているのである。よりどころのない uneasy な魂は崩壊した秩序の瓦礫の上をさまよつてにすぎず、巨大な文明機構は個人をその齒車の中に押しつぶそうとしているかのように見える。且て權威が信頼の結合形式であつた時、一応の社会秩序はその上に立つて回転していたに違ひないのであるが、權威が批判の火にやき払われたあと残つたものは中心の喪失からくる義務の峻厳の消滅であり、確信の意識の敗退であつた。一方人類の統一化を誠実に目指すかに見えた人間の水平化の過程は人間を没個性的な一つの単位にまでおしちぢめ、平均的な集団機構の下に人格の実体をうばい去つてしまふ。今や残されているものは「徹底的な危機の意識としての危険と喪失の意識」あるのみと言う外はないのである。(カール・ヤスパース、三笠書房、九九頁) 精神すらもが時として一時的な秩序恢復のための手段として扱われ、それ本来のあり方を失つてしまつたかのである。そこにおいては人間はもはやどんな意味からも精神的尊厳を保つ存在ではあり得ず、無名の灰色の群集の一人にすぎなくなつてしまふ。凡ゆる人間は元来自分自身の個人性を持つてゐるにもかかわらず、分化されない群集の中にとけ込んでしまふ。時に Homo Economicus、Homo Fabre と言う名前できり扱われる事はあつても遠い以前から人間である事を停止してしまつてゐるのである。タイムズの文芸附録はこうした不安の時代、挫折の時代の心理を、an unbalanced imagination, short-

「人文学」英語英文学 特集既刊号

第六集

- Chaucer's Religious View...上 野 直 蔵
The Study of Literature ...R. H. Grant
所謂「中間的叙法」に就て...吉 岡 義 睦

第八集

- 抑圧の意義とその効果吉 岡 義 睦
Shakespeare 英語の
一特質中 村 健 蔵
Shakespeare の定冠詞桜 井 忠 一
英文学に於ける
近代リアリズムの形成木 口 敏 郎
英文学に於ける諷刺 (一) ...太 田 藤 郎

第十二集

- Old English Ballads に於
ける宗教的要素児 玉 実 用
Eugene O'Neil の作品に
於ける "Mother"木 村 俊 夫
On the Source of the
Pardoner's Tale.....上 野 直 蔵

第十五集

- T. S. Eliot について
一特に彼の世界像を貫くもの一...片 山 春 一
本邦に於けるシェリの
詩の漢訳衣 笠 梅 二 郎
シエクスピアの語戯に
ついて中 村 健 蔵
英文学に於ける諷刺 (二) -W. M. サツカ
レーのヒューマニズム一.....太 田 藤 郎

第十八集

- D. G. Rossetti の作品に見られた
芸術性について (1) -The House of Life
を中心として一.....児 玉 実 用
ホイットマンの一考察
一ソウルをめぐる一.....木 口 敏 郎
シナリオに現れた Interjection
of Surprise 就いて吉 田 隆 章
Eugene O'Neill の作品に現
れた「白く塗る墓」...木 村 俊 夫
「カムズベル氏英国
海軍の詩」前後衣 笠 梅 二 郎

同志社大学人文学会編
各 冊 ￥100

ness of wind, lack of assurance, terror of wasting time の四つに分類している。(Times, Literary Supplement, The Mind of 1951, Aug. 24, 1951 ii) 誰しも不満の感じを免れる事が出来ないために、何等希望のもてない未来を理性の判断から認めざるを得ないために、強力な意志だけではとうてい解決出来ない心理的袋小路に追い詰められてしまう。だから全体としては勿論否定なのであるが今日一日だけは肯定しようと言う、刹那の現象面に対する条件反射のみが残る事となり、「エンジンは回転を早めるが馬力はますます減する」(ibid., ii) ようになるのである。

こうしたどうにもならない行き詰りを打破して、本来の秩序を再建し、混乱を軌道に引きもどす事によつてこの人間存在の危機をくぐり抜けようとする試みは色々な形で試みられて来た。混沌にみちた現代社会の不安があるがままに直視する事によつて自慰的な樂觀や「偽れる範疇」を捨て去り、現代人の信念の喪失を今一度再認識して、人間性の有限を諦観する事が出来た中世の姿を目標としてゆこうと言うのもその一つの現れであつた。つまりは disbelief の世界を捨て、belief を獲得しようと言うのである。過去や個人的伝統の中に統一的な信条を求めようと言う行き方や、新しい未来像

の中に信条の世界を見ようとする考え方や、或は又、原始の社会に立ちかえる事によつて、迷ひ始めた岐れ道を見付けてそこからやり直そうとする方法も含めて、この比類なき混乱の世界の中で首尾一貫した一つのモラル、心のよりどころを求めようとする努力は執拗に試みられて来たのである。精神の尊厳を再認識する事、言い換れば *anxiety* と言い *frustration* と言い、要するに神経的肉体的不安にすぎぬものに対して精神、*faith, belief* の優位を確立し、時に手段としてしか考えられなかつた精神、神経と同じく無力なものとして同一視されていた精神を現実と対決させる事によつて現代の病患を克服しようと言うのであつた。事実結果論的にみて、あまりにも誇大に危機感をうたう事によつて通俗に媚びた多くの文学がそれ自身不安の一現象となつて、今までのものに又一つ付け加えられる事にはなつても決してそれを解決しては来なかつたからである。

こうした考え方はただに文学の世界のみならず、社会的な問題に対する発想法としても共通する行き方であるが、キリスト教の伝統の強いイギリスにあつて、もし一人の作家が *communism* にあきたらず、*anarchism* に奔らないとすれば他力的な色彩の強い、そして混乱の際、強固な *doctrine* を持つように見える *Catholicism* にたようとする傾向は言わば当然の過程であつて、なかなく第二次大戦後のおそるべき国際的不安のなかにこの傾向は著しく強まつており、

理論的には Christopher Dawson や Martin D'Arby 或は T. S. Eliot, 作家としては Katherine Raine や Evelyn Waugh と言つた Catholic writers を輩出したのである。グレアム・グリーンがその数多くの作品の中で、人間の罪の問題と真正面から取組んで来たのもこうした時代を背景とした上での事であつたのである。

エリオットは「カクテル・パーティー」の中で舞台の上には姿を現はさない人物として大胆にも神を登場せしめているのであるが、グリーンも同じ意味合から、恋愛で結ばれた男女二者に対する第三者の形で神を人物として使つてゐる。小説の舞台の設定としては従来 of the 諸作よりはより一般的な背景を撰ぶ一方、自らの信念の表白のためには、敢てこうした登場人物を迎え入れる事をためらわなかつたと言うのは、聖女セアラの演ずる奇蹟と共に、作者グリーンが所謂リアリズムと言うものに信を置いていない事を示している。成程、こうした話は有り得ない事かもしれない。そうして、「事件の核心」のスコウビーや、「権力と栄光」の *whisky priest* がつくりものであると言う批難は當つてゐるかもしれない。が、よしこうした人物が実在すると言う蓋然性はないにせよ、*possibility* はあるのであつて、グリーンの本命題は奇蹟を不可能だと信ずる立場を拒んで、奇蹟或は超自然な事はおこりうるものだと思ふ事にあるのである。作者は、「小説家の哲理とはしばしば均育を欠くものである」(*The Lost Child*—

hood, 1951 Eyre & Spottiswoode, p. 39) と言っているが、例えばこの「愛の終り」の場合、一人の地上の俗人の地獄を描くためには、どうしてもセアラと言う聖女が必要だったのである。結果として現われた行為と言う現象面をとらえて問題提出の契機としようとするのならば、一定の単位時間内の人間の動きを克明にうつし取る事も一つの方法であろうが、社会的な約束でしかない行為の正邪ではなくして魂が直面する善悪の方向を見きわめようとするにはこうした象徴にたよらざるを得なかつたのである。

こうして高度な回心に到るセアラの堅信への過程とその奇蹟と、モーリスの頑なな実証精神、或は「高き夢と呼びなすもの」の世界と低き夢しか見る事の出来ぬ近代の世界」(T. S. Eliot: *Dante F. & F.* p. 263) と言う二つの対比を考えて見る時、凡俗の我々がセアラの崇高な宗教的解脱よりはモーリスの人間の苦しみにより心惹かれるとしても、基督教的な伝統の基盤のない我々の場合或る程度やむを得ぬ事ではなからうか。エリオットは Pascal の *Pensées* に寄せた序文の中で、すぐれた科学者であつたパスカルの教次にわたる回心への苦しい過程をのべ、まず intelligent believer であらねばならぬ事、それには rejection と elimination を通して到達されねばならぬ事を説いている。(Everyman's Library No. 874 p. xii & f) 必要な事は、虚脱 acedia から脱け出して苦悶する事であり…… not belief, but suspension (T.

S. Eliot, *Dante* p. 259) であると言っているのである。したがつて我々は belief の世界に到るに先立つて disbelief の世界の苦しみを、砂漠のすさまじさを少く共見詰めなければならないのであつて、信仰でなくともせめて当惑を感じるべきなのである。我々の信ずる世界が実は disorder と disbelief 以外の何物でもない事を考え、何物もそこから生れては来ない事を考えるべきである。救われるにせよ救われぬにせよ要は魂の問題なのであるから。

最後にグリーンが自ら entertainment と呼んでいる一連の小説について一言したい。手代順には *Stamboul Train* (1932), *A Gun for Sale* (1939), (アメリカでは *This Gun for Hire*); *Confidential Agent* (1939), *Ministry of Fear* (1943) *The Thirde Man* (1950) *Loser Takes All* (1955) の六篇である。(Uniform Edition と銘打った Heinemann の著作表では *Brighton Rock* (1938) を novel の項目に加えているのでここでははぶいておく。) これ等の小説に共通する特徴は、その何れもが、逃亡と追跡と言う形式をとつている事、各々、媒体としての主題、例えば、「恐怖省」における pity、「密使」における悲劇的な義務感、「拳銃売ります」の復讐と言つたモチーフが可成明瞭に打出されている事、尽くが、ヨーロッパの戦時下の話である事、映画批評家であつたグリーンだけにスリラー的手法がきわめて緊縮した

形の構成と相まつて成功を収めている事などである。

こうした entertainment をこれ以外の言わば serious な作品と較べて見て言いうる事は、作者が抱いているテーマを物語に組立てるに際して、前者の方がそれをより明らかに図式化して扱っている事であつて、例えば章分けの如きも「密使」に見られる様に、「追う人」、「追われる人」、「最後の一発」等となつていたり、「恐怖省」のように、「不幸な人間」、「幸福な人間」、「完成した人間」となつていたりする。これらの全作品が映画化されたのを見ても、渋滞や難解な箇所がなく、配分宜しきを得た構成の下に、力の葛藤を如何に巧みに扱っているかが覗えるのであるが、反面、人物が類型化してしまつており、異常なまでの急迫した雰囲気をもり込む事に急なあまり、人物の動きと主題との有機的な結合が弱いように感じられる。

この二種の作品を特に区別しないで取扱つている批評家もあるけれども、以上のような意味から言つて、つまり芸術的香気が稀薄である事、思想性がそれほど強くない事などから言つてやはり、この一連のグループは、純然たる娯楽物ではないにせよ、serious な作品とは区別して考えるべきであると思われる。(完)

「主流」前号(第十八号)目次

コウルリッヂ論考……………薬師川虹一

想像力の挫折

シャールウッド・アンダースンと「ワインズバーク・オハイオ」……………金関寿夫

詩の翻訳について

——ドライデンの場合——……………北垣宗治

英詩

INTERVIEW & OTHERS (小林万治) A BIRD OF PREY (金関寿夫)

メルヴェイルの現代性について……………原田敬一

本違い——冲塩信男君の思い出に——……………衣笠梅二郎

「同志社文学」の背景……………重久篤太郎